

特集にあたって

瀧内比呂也

消化管がんについては、食道がん、胃がん、大腸がんに関する各治療ガイドラインが発刊されている。しかしながら実臨床においては、各ガイドラインの推奨する治療法が必ずしも適応とならないケースもあり、その取扱いには十分な注意をはらうことが肝要である。なぜなら各ガイドライン作成のベースとなる臨床試験によって得られたエビデンスは、厳格な選択基準を満たした患者を対象としたデータだからである。むしろ実臨床では、それら選択基準を満たさない症例も数多く存在し、そのようなケースの治療選択には慎重な対応が求められる。例えば食道がんでは、高齢者の患者も多く、シスプラチンの取り扱いには十分な注意が必要だ。また胃がんでは、臨床試験の対象とはなりにくい腹膜転移症例も多々あり、必ずしもガイドラインで推奨された治療法が適応とならないケースも多いと思う。そして大腸がんにおいては、ガイドラインが推奨するファーストラインの標準的治療も多種多様であり、症例によっては何がベストの選択になるのか悩まれるケースもあると思う。その一方で消化管がんにおいては、分子標的治療薬の果たす役割も大きく、それら薬剤のもつ特有の副作用を十分理解して対応することも、治療継続に際してきわめて重要である。

本書の企画に際して、それら実際の医療現場で先生方が疑問に思える点や不安を覚える点に応えるべく、最新のエビデンスのみならずガイドラインが推奨する標準的治療の適応とはならない高齢者や緩和的治療も項目の一部として取り上げさせていただいた。そして各項目を担当していただいた専門家の先生方には、これから消化管がんの化学療法に取り組もうとする後期研修医にも理解できるようわかりやすい解説をお願いした。さらに専門家の立場から、なるほどと思われる治療のコツもご紹介いただくようお願いした。これら専門家にご紹介いただいた貴重な治療に関するエッセンスは、後期研修医や若い消化器内科医にとって、自らが判断して診療するための礎となるはずである。これから消化管がん患者と接する機会のある先生方のみならず経験豊富な先生方のご要望にも沿う内容となっており、是非本書をご活用いただき、患者個々の病態に即した治療を実践していただけたら幸いである。

Profile

瀧内比呂也 (Hiroya Takiuchi)

大阪医科大学附属病院化学療法センター 教授

1985年大阪医科大学卒、M.D. Anderson Cancer Center 留学などを経て、2006年から化学療法センター長、2009年から現職。

専門領域は消化器がん腫瘍学。